



TITLE:

<大會抄録>唐代官運の脚直について

AUTHOR(S):

清木場, 東

CITATION:

清木場, 東. <大會抄録>唐代官運の脚直について. 東洋史研究 1988, 47(3): 588-589

ISSUE DATE:

1988-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154250>

RIGHT:

し、(三)は中央が、個別人民ないし個別家族を血縁・地縁の諸關係から全く自由にしたことを必ずしも意味せず、制度上、別の新しい血縁・地縁の諸關係に編入することを意味したもの、と考えられる。以上の點を指摘できる。

また、乾隆期、廣東省の轉籍政策を検討すると(一)省の各級官僚が、中央禮部の例を故意に曲解・無視する事實がある。(二)したがって、人民大衆と中央との間に位置する省レベルの政治を、中央とは別箇の要素を具有する、ひとつの政治主體と考える必要がある。以上の點を指摘できる。

一九二四年の製糸女工の爭議と糸繭女工會の成立

曾田 三郎

上海において、多數の製糸工場が同時に操業を停止するような爭議が発生するのは、一九二二年からである。女青年會のようなキリスト教系團體の影響を受け、この年の爭議から始まった「女工組合」の結成や、女工の啓蒙と労働條件の改善を目的とする運動を、まず指導していったのは穆志英らの一部の女管車たちであった。

一九二四年六月の爭議は、前年度からの不況によって生じた賃金問題を主な原因にして起きたが、この一般女工の自然發生的な爭議を解決に導くうえで重要な役割をはたしたのも、この年の一月から糸紗女工協會の結成を準備していた穆志英らの女管車グループであった。穆志英らは賃金問題では譲歩しつつ、二二年の爭議のときか

ら掲げていた課題のなかの、「女工組合」の結成の經營者側や官廳からの認可の獲得に重點を置いて、爭議の解決を指導した。その結果が、糸繭女工會の成立であった。女管車を主要な構成員として成立した糸繭女工會は、勞資協調を原則に女工の生活の擁護と爭議の再發の防止を表明して活動していたが、一九二六年の新繭年度をむかえる頃には、労働條件は現状のままで女工の労働を督勵する傾向が強くなっていた。

唐代官運の脚直について

清木場 東

唐王朝の朝廷・州縣・邊軍の物質的基盤は穀物・布絹におかれ、天寶中には五千數百萬端疋屯石に達した。それらの輸送には民間の車舟・馬驢・百姓を動員し、運賃を支拂った。運輸經費は厪大となり、財政の大きな支出科目の一つとなっていたと思われる。その把握には運賃法である脚直法の理解が基礎の一つとなる。『大唐六典』三・度支にみえる脚直法は、陸運の駄脚・車脚、水運の船脚を定めている。駄脚は輸送料・車脚は車使用料と言い換えてよく、負般・駄運では駄脚を、車運では駄脚に加えて車脚を拂う。水運では船使用料を認めず、輸送料である船脚のみとされた。水陸の輸送料金は、基本的には貨物の輸送努力の多少に對應して支拂う勞賃であり、重量・距離・輸送の難易で高下された。これに地方の料金格差(駄脚のみ)及び貴貨・賤貨の相違等により若干の差をつけた。車

使用料は重量・距離のみを基準とした。同法には従事日數、車舟の牛・夫の數、或は輸送の遲速等により諸脚を高下する考え方はみられない。最も高くついたのは車運、最も安價であつたのは諸水沿流の船運であつた。また黄河派流は負般・駄運より高くついていた。唐後半に至つても運賃法は改められず、官脚は民間の私脚よりはるかに安く抑えられていた。また市價より數倍高い虚估計算の絹帛を支拂いに當て、運賃を不當に安くした例もみられる。

カイクバードの時代

井 谷 鋼 造

アラウッディーン・カイクバード一世（在位一二〇—一二三七）の時代はルーム・サルタナト（セルジュク朝）の最盛期であつたと言われている。それはこのスルターンの時代ルーム・サルタナトが對外的に積極的な軍事行動を展開し、かつそれらを支援すべき國內狀況が安定していたことによる。ルーム・サルタナトの歴史に關わる最も重要な根本史料であるイブン・ビービーの著作にはカイクバード時代の三つの主要な軍事行動として、東部アナトリアをめぐるアイユーブ朝諸王との對戰、クリミア半島の港市スグダクへの渡海遠征、ホラズムシャー、ジャラールッディーンとの對決が擧げられている。本發表ではこれらの軍事行動の具體的な狀況を明らかにすると共に、その背後にあるカイクバードの對外的な基本姿勢とルーム・サルタナトの置かれていた歴史狀況を考えてみたい。

カイクバードの軍事行動は主としてアルメニア、ジャズイーラ等の東部邊境へ向けられたが、これはかつての大セルジュク朝領土への接近を圖ることによりセルジュク家の西アジア支配の復活を企圖し、同時に東西交通に影響力を行使することを意圖したものであつた。また、小アルメニア（キリキア）及びクリミアへの遠征は地中海、黒海を介した南北貿易路の確保を目差したものであつた。このような積極的な對外姿勢の成功と領域の擴大によつて「ウルグ・カイクバード」の時代には來たるべきモンゴル軍進攻の脅威を逃れた人々が多くルームへ避難して來た。ペルシア文學史上最も有名な神秘主義詩人の一人で、ルーム・サルタナトの國都コニヤにメヴレヴィー教團を創設したジャラールッディーン・ルーミーもそうした人々のうちの一人であつた。

マムルーク朝スルターン・
アル・マリク・ムアイヤド・シャイフの時代
（八二五—一四二二—一四二二年）について

—ブルジー・マムルーク朝時代の

改革の一例として—

菊 池 忠 純

ブルジー・マムルーク朝第五代スルターンのムアイヤド・シャイフは、第一代スルターン・バルクークのマムルークでスルターンになつたものの一人で、アル・アシュラフ・バルスバイー（八二五—